

Vol.
15

Shumei International

N EWSLETTER



NPO法人 秀明インターナショナル

〒529-1814 滋賀県甲賀市信楽町田代353-1

TEL:0748-82-3140 FAX:0748-82-3143

E-mail : info@nposhumei.or.jp

http : //www.nposhumei.or.jp



2015年12月1日発行



Shumei International is dedicated to improving the human community by restoring the environment, fostering a deep appreciation of beauty and the arts and cultivating leadership among the next generation.

The organization was founded on the philosophy of Mokichi Okada, who taught that cultivating respect for nature and appreciation of the inherent beauty in the natural world will uplift human society and enable a truly balanced and sustainable world.

Shumei International has established programs around the world with a focus on Natural Agriculture.



【表紙】
ザンビアのベンバ地区に新しく学校が開校した。新しい校舎と、一期生となる入園予定の子どもたち。青い色のシャツは学校のユニフォーム。



秀明インターナショナルは、1.国際協力 2.環境問題への取り組み 3.優れた芸術による人心の向上の3点を基本的なプログラムとして実践します。この実践により、個々の人間性、精神性の向上を促し、社会へ新しい人生観、価値観を提唱したいと考えています。そして、私たちと同様の目的を持つ世界中の人たち、団体と協力しあい、世界平和に貢献していくことを目指しています。

Special Topics

特集

「ザンビア自然農法ショー 10th Anniversary」

- 3 原点回帰 第10回自然農法ショーによせて バーバラ・ハチプカ・バンダ
- 12 自然農法ショー 10th Anniversary フォトギャラリー
- 14 ザンビアプロジェクト 11年のあゆみ 加藤 光成 (Shumei スタッフ)
- 28 SNN北海道センター第4回セミナー「食から^{みらい}美来へ」 奥田 政行 (アル・ケッチャーノ) ヴァンダナ・シヴァ (ナヴダーニャ)
- 34 母なる大地：生きている土 ～アースフェスティバル2015 ナヴダーニャ～
美しい土 アリス・カニングハム (秀明インターナショナル理事)

ザンビア 自然農法ショー

10th Anniversary 2015.8.18~20

原点回帰 第10回自然農法ショーによせて

NADPZ (ザンビア自然農法開発プログラム) 代表 バーバラ・ハチプカ・バンダ



パン・アジア・ユースリーダーシップ・サミットのパンフレット

母の夢が導いたShumeiとの出会い

2004年、勇敢にも日本からShumeiの方々がザンビアに来てくださり、アフリカのShumei自然農法による革命が始まりました。ザンビアを訪問中、Shumeiの方々にムバラ女性農民組合という女性グループに会っていただきました。これは農村の小規模女性農民2,000人からなるグループで、私の亡き母、ジェシー・ブレンダ・ハチプカが女性農民たちを励まして立ちあげた組合です。母が組合を作った目的は、農業をツールとして、女性たちの家庭での地位向上と収入の増加を図ることでした。

母はザンビアの農村に生まれ育ち、農村の女性であるということが、毎日の家事労働との闘いを意味すると知っていました。母の人生はそのような卑賤から始まり、最後には政治家の夫を陰でしっかり支える献身的な妻となり、4人の子どもたちに海外教育を受けさせました。このような体験をした母は、家庭、地域社会、国の発展の過程において、女性たちが担うべき重要な役割を理解していました。つまり、一人の女性を教育するという事は、地域社会全体を教育するのと同じことなのです。

母が亡くなったとき、私は二十歳で、若者であると同時にまだ子どもでした。農民組合の女性たちが私たち兄弟のところに来て、母の仕事を続けてほしいと懇願したとき、丁重にお断りしました。なぜなら、皆、自分たち

の人生でやっていることの方がより重要だと考えたからです。このときの私は母の魂が、ためらっている私を母と同じ道に導いているとは、思いもよりませんでした。

2004年、UNDP (国連開発計画) がGPIW (女性宗教家による世界平和) と協力して主催した、ユース・リーダーシップ・サミットで、私はザンビアの青年女性として初のMDGs (ミレニアム開発目標) の唱道者となりました。MDGsとは、2000年に開催された国連ミレニアムサミットの後に採択された8つの国際的な開発目標です。国連加盟国189カ国全てと少なくとも23の国際機関が、2015年までに開発目標の達成を目指して協力すると約束しました。

私にとってミレニアム開発目標の一連のユース・サミットは、世界中から参加した数百人の青年と出会える機会をいただいた、大変素晴らしい体験でした。私たちは互いに語り合い、共に歌い、笑い、将来の計画を立てました。UNDP、GPIW、そして、2004年9月、広島でパン・アジア・ユースリーダーシップ・サミットを主催したShumeiなどのパートナーは、未来の大統領、総理大臣、ノーベル賞受賞者のためのプラットフォームを作ったのでした。私たち青年は一丸となり、世界と私たちの指導者に向かって叫ぶ言葉を生み出しました。「今こそ、私たち青年が永続的で持続可能な変化を起こすときである」と。



※黄島 瀬戸内海国立公園内にある島。1962年より自然農法を実施。青少年育成を目的としたさまざまな研修や、異文化交流なども行われている。

ザンビアの現状と「原点回帰」

広島でのサミットが終わって日本を去るときの私は、自然農法という武器を得て勇気百倍でした。Shumei とムババラ女性農民組合の間に結ばれるであろうパートナーシップにワクワクし、気持ちが明るくなりました。私は組合の女性たちにより良い生活を、彼女たちの子どもたちに未来を与えたかったのです。自然農法の理念を理解し、信じてことができました。私が始めて Shumei と出会い、黄島※を訪れたとき、私の理性と心に光が灯りました。即座に、自然農法こそ、私の目の前に置かれた仕事を成し遂げるために使うことになる手段であると理解しました。

それから、ムババラに戻り、私が黄島や、Shumei ファミリーのホームステイ中に学んだことを女性農民たちに伝えることにしました。いざ、自然農法と自家採種のトレーニングを受けるべきだという大計画を伝える段階になったとき、私はとても怖くなりました。私が黄島で目撃したことは、農業の単純な手法であり、世界中のどこでも適用が可能であり、適用すべきものでした。それほど簡単なことなのに、私はなぜ怖くなったのでしょうか？

私が日本について語り、日本で自然農法がどのように

まくいっているかを話したとしても、きっと彼らは笑うだろう。それが怖かったのです。彼らが笑う理由は、日本とザンビアは遠く離れており、数えきれないほど多くの点で異なるからです。私たちアフリカ人のほとんどは小さなことは見ようとせず、大きな物質的な事柄を見る傾向にあります。それは、経済だったり、為替の動向だったり、自動車製造だったり、実在する技術の量、そして、トムクルーズが主演した映画「ラストサムライ」が日本で撮影されたという事実だったりします。(その年の夏は「ラストサムライ」がヒットしていた)

以上のことを理解した上で、ザンビア人の身になって考えてみれば、貧困、一日1ドルを稼ぐための苦闘、失業、一緒に住む多くの家族を食べさせ、教育を受けさせるという大変な責任を負っている状況で、大多数のザンビア人の頭と心はかたくなになっています。そこに、私のような若者が大人たちに向かって、「私は日本に10日間行ってきました。ここに自然農法を教えるために来ました」と言おうとしているのです。

彼らが聞いてくれると思いますか？彼らが両手を広げ、満面の笑みを浮かべて知りたかったことは、その日本人たちはより多くの自動車やトラクターを寄付してくれるのか、そして肥料と種子を買ってくれるのかということでした。

ですから、このプロジェクトの最初の数年間は、目的を単純化して、「自立」という旗印を掲げて何度も訴えることに専念しました。私の両親や祖父母の時代には、肥料もF1品種の種子も文字通り存在しませんでした。その時代の農村の伝統的農業に焦点を当て、私のメッセージを単純化し、パッケージ化しました。例えば、高価すぎて入手困難な肥料と農薬、農村のコミュニティーにとって自立することの大切さ、民間企業の、人々の絶望につけこんでお金を巻き上げようとするやり口の罠にはまらないことがいかに重要であるか、などの点をメッセージに盛り込みました。

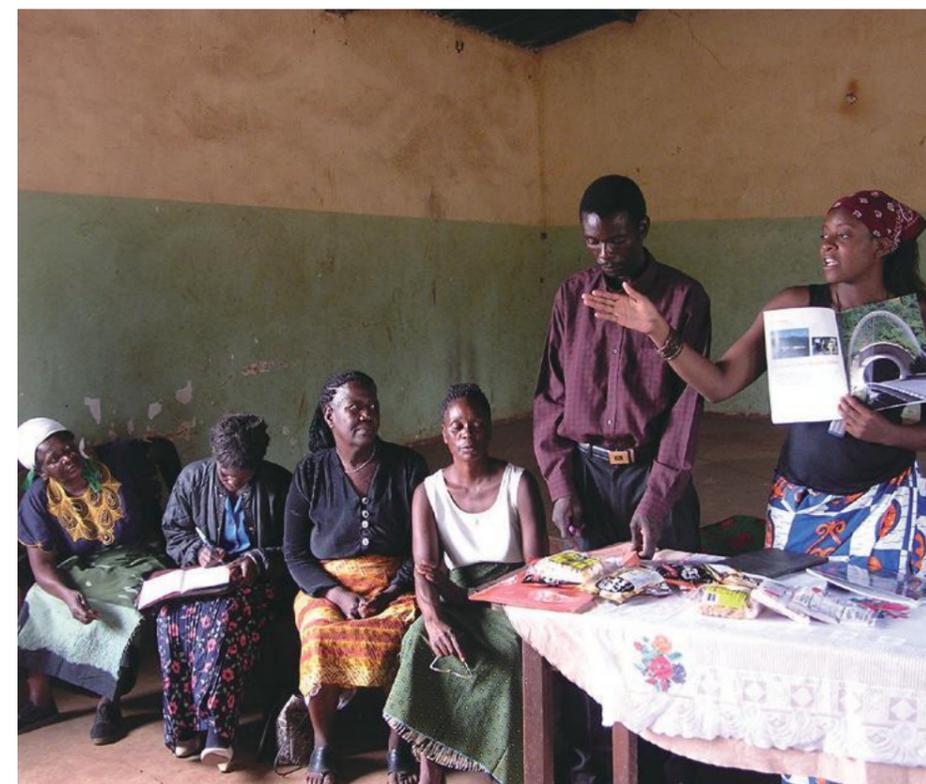
簡単に言うと、これは「原点回帰」への呼びかけでした。よりシンプルで、より正直なライフスタイル、はるか昔、私たちの祖先の時代に皆が送っていたようなライフスタイルです。さらに、これは「自然回帰」、全ての生命の源である自然に還れ、という呼びかけでもありました。

私は、切迫した危機について農民たちに思い出してもら

おうと何度も強調しました。例えば、これまでに人類が引き起こした生態系へのダメージで、もはや頼りにならなくなった継続的に不安定な気候変動についてです。「自然農法こそ、生き残って未来を見るための唯一の方法である」という私たちのメッセージは、当時も今も変わりません。

このメッセージの中心には、気候変動に適応できる作物の主要な要素として、より強靱でより回復力のある在来種の種子がありました。在来種は自然で、より健全で、より味の良い食糧であることを強調しました。そして農民たちが収量を確保するために必要な労働、決意、計画、管理を明確にするために、自然農法の精神的理念を整理し直しました。最後に、私たちが非常に注目したのは、コミュニティーの参加の大切さと「問題は共有すれば半分にできる」という古い教えを活かすことでした。

この11年を振り返り、このプロジェクトのことを思うと、誇りと達成感を覚えます。しかし、今後さらに長い年月の間、このプロジェクトに注がれるべき大変な仕事を思うと、その気持ちはつかの間で、急速に目の前にある仕事と現実に戻されていきます。ですから、私が直面してきた難題(挑戦、課題)について人々から聞かれると、私はいつも笑いたい気持ちになります。それは数えきれないほど多くの難題があったからです。



2004年11月最初のザンビア訪問時、Shumeiを紹介するバーバラ



メスの種子 右が在来種、左がハイブリッド種



さまざまな困難

最初の困難は、私はただの若い一女性にすぎなかったことです。私が組合の会合を呼びかけても、多くの組合員たちは同調しませんでした。なぜなら彼女の夫たちは、自然農法の話を書くために出かけるのは重要ではない、それより、もっと多くの肥料と F1 品種の種子を入手するために努力の方が重要だと考えていたのです。私が若い女性でありながらこの文化の壁を突き破ろうとしたことが、事態を複雑化させた最大の要因でした。

ザンビア政府やその他多くの人々は、肥料と F1 品種の種子が将来への道であると推進しています。多くの女性たちがいるコミュニティの広場に立って叫んでも、私の声は何度もかき消されました。それでも何とか相手に動いてもらおうと、大きな声で叫び続けました。「自然農法こそ、自家採種こそ、将来への唯一の道なのです！」と。その頃は声が枯れて出なくなったことが何度もありました。野外では音響設備がなく、精一杯の声で叫ばなくてはならないからです。あるとき、声が枯れてしまい、医療センターに電話すると、男性に間違われ、「こんにちは、旦那様、ど

うされました？」と言われました。

この地区にはインフラもありませんでした。自動車ですら 300 マイル (482km) の距離を運転するのに 6 ~ 9 時間もかかりました。政府がこの地区に道路を作らなかったのです。さらに、私たちには会合場所すらなく、樹の下に集合して会合を開きました。トイレに行くのに少し離れた茂みに行かなければならず、その道すがら蛇が出ないかどうか、とても心配しました。また施設を建設するとき農民たちは窓枠と窓ガラスの支援をお願いします。Shumei のおかげで、彼らが望んでいた建築資材は手に入りましたが、建設が進む中、窓枠のサイズに窓ガラスが合っていないことに気づき、尋ねると彼らは、悪びれもなく「この方が空気が入ってきていいと思った。」と答えたのです。そして、異なる村々から集まっている組合員たちがケンカや口争いを始めたときには、仲裁をしたり、首長を連れてきて話し合いをしてもらうことも何度もありました。

最も直面している困難は、政府からの支援を取り付けることが非常に難しいという点です。ザンビアではこの 11

年間で大統領が 4 回変わり、もうすぐ 5 人目が誕生します。アフリカの政治では、新しく大統領が就任すると人事を総入れ替えます。大臣や副大臣が私たちのプロジェクトの現場を訪問し、「あなた方がやっていることは非常に素晴らしい。政府はあなた方を支援したい。」と言葉を頂いても、それから半年や 1 年後にはその方は大臣ではなくなりました。大統領が変わったからです。

その中で、誇るべき点は、農民たちが数々の困難の中でも決してあきらめなかった、という事実です。チョマ地区という一つのコミュニティから始まったこのプロジェクトは次のコミュニティへと拡大しています。そして役人

と違って地位が長年変わらない（伝統的な地方制度の最高位である）首長たちが私たちのプログラムを積極的に応援してくださっています。コミュニティの伝統的な制度に加わることの利点は、コミュニティがこのプロジェクトを包含し続けることで、成長を続けることです。私たちのところにザンビアの多くの地域からたくさんの要望がきています。車で 8 時間離れた場所や、900km も離れた村が自然農法プロジェクトを始めたいというのです。このように困難の後に好機が訪れています。私はこの波に乗り続けます。そして、このプロジェクトを続けていきます！

●人間開発指数(187カ国)

順位	国名	HDI値
1	ノルウェー	0.944
2	オーストラリア	0.933
3	スイス	0.917
4	オランダ	0.915
5	アメリカ	0.914
6	ドイツ	0.911
7	ニュージーランド	0.910
8	カナダ	0.902
9	シンガポール	0.901
...
17	日本	0.890
...
141	ザンビア	0.561

※HDI値:健康、教育などの「人間の豊かさ」を表す2013 UNDP(国連開発計画)

●5歳未満児死亡率(194カ国)

順位	国名	USMR
1	アンゴラ	167
2	シエラレオネ	161
3	チャド	148
4	ソマリア	146
5	中央アフリカ共和国	139
6	ギニアビサウ	124
...
21	ザンビア	87
...
150	アメリカ	7
160	イギリス	5
167	韓国	4
185	日本	3

※USMR:出生1000人あたりの死亡数 世界子ども地球白書2013(ユニセフ)





美しい自然と持続可能な開発

この10年間で、私は多くの方々とたくさんの議論をしてきました。まず、私の恩師であり、相談役であるアラン・今井さん、そしてShumeiのスタッフの皆さま。今の私があるのはこの方々のおかげです。

私たちはアフリカについて語り合ったものです。この土地の美しさ、新鮮な空気、どこまでも続く広大な空間、美しい朝日と夕日、望遠鏡を使わなくても星が見える夜空、壮麗でカラフルな女性の伝統衣装、大きな歯が並ぶ笑顔、力強く響く歌声とドラムとダンス、美味しい自然の野菜、鶏が放し飼いでかけずり回り、しっかり火を通さないとゴムよりも固くて歯が抜けてしまうかもしれない鶏肉。ザンビアという国に住む私たちの文化と存在の80%は自然からきているのです。

アメリカ、日本、ヨーロッパ、その他の多くの先進国の国々に住んでいる人々は、ザンビアや他のアフリカ諸国が持っている豊かなものを既に失ってしまい、それを喉から手が出るほど欲しがっているのに、どうして私たちアフリカ人は、その自然を人口過密、汚染、物質主義と引き換えに開発したがるのでしょうか。

1991年、ザンビア経済の自由化、さらに国内の鉱山と製造産業の民営化によって、あらゆる商品とサービスが簡単に手に入るようになり、私たちがザンビア人として外の大きな世界にさらされることになっただけでなく、多くの

アフリカ人が良い暮らしだと考えるイメージの変化をもたらしました。ショッピングモール、ケーブルテレビ、日本製の中古車、国境を越えた世界へのアクセス、これらによってザンビアの輸入産業も増加しました。

2010年、二階建てのエスカレーター付きのマダヒル・ショッピングモールがオープンしたとき、ザンビア中から人々が詰めかけました。モール内の新しい店で買い物をするためではなく、真新しいエスカレーターに乗って上ったり下ったりする行列に並ぶためです。これまで動く階段を見たことがなかった子どもたち、お父さんお母さん、おじいさんおばあさんが、エスカレーターに飛び乗るのを注意されて泣くのを見るのは驚きでした。それはザンビアにとって、歴史の教科書に載ってもおかしくない歴史的な出来事でした。

皆さんは、ザンビア人がなぜアメリカン・ドリームを夢見て、テレビで見たことがある豪華でセレブのようなライフスタイルを欲しがると聞かなくてもいいかもしれません。それは、アフリカ大陸として、私たちはまだ開発のピークに達していないからです。アフリカはまだ産業革命も体験していないし、内戦の影響も見えない。このため、私たちアフリカ人はもっと欲しいと思うし、先進国のようになりたいと思うのです。しかし、先進国の皆さんは、国としても個人としても開発の良い面と悪い面を見てきたことでしょう。

汚染の増加で地球は温暖化し、製造産業は人々を働きバチに変えて、農業は自然ではなく人工的な産業に変わり、子どもたちは肥満でテレビに動かされるロボットのようにになりました。

このような体験が、皆さんを「原点回帰」というシンプルな欲求に導いたのです。自然と精神的につながり、お互いの心と心で結びつきたい！と願ったのではないのでしょうか。

開発途上国と先進国という二つの世界を体験したことがある人間として、私は祖国ザンビア、そしてアフリカのた

めに開発を望んでいます。しかし、この世界を犠牲にしたり、世界の未来をなくすことは望んでいません。私は信じているのです。アフリカは開発の途上にありますが、他者の冒した過ちから学び、新たな戦略を生み出すことができる。そして、私たちの戦略には、自然、祖先、私たち自身の心が含まれなければなりません。私たちがこれら3つの原点と強く結びつけばつくほど、より美しく健全で持続可能な世界を、子どもや孫の世代のために創造することができる、と信じています。



祈りそして「小さな種子」

※ NADPZの女性農民を代表して、これまでShumeiからいただいたご支援に感謝しています。現在、私たちの自然農法の現場は整備が整ってきましたので、Shumeiの皆さまがいつかザンビアを訪問されることを望んでいます。ボランティアとして農民たちにさまざまなスキルを教えたいただき、彼らが経済的な幸福を増進できますようお手伝

ください。そして、どうか、ザンビアの農民たちのことを思い、祈り続けてください。私たちがお互いに思い合うことで、精神的なつながりが生まれ、この世界を変えていく力になるのですから。

最後に小さな自然農法の種子の一生と奮闘について私が昨年書いた詩を紹介します。

SEMINULUM

私は、百あるいはそれ以上いる兄弟たちの中で
一番若く、一番小さかった
守護霊に救ってもらった私は、セミナラムと名付けられた
セミナラムとは「小さな種子」という意味だ

学校では、人気者のH14たちになじられ、笑われ、いじめられた
H14とは改良された種子で、全てを兼ね備えた子どもたち
彼らは強く、あらゆるものに耐えられるように製造された
彼らの使命は世界を救うこと！

子どもころ、暗闇に囲まれて
私には目的がない、存在理由がないと言われた
なぜなら私はとても小さいからだ
この暗闇の中に、一つの光があった
私の内からの光は、決して消え失せることはなかった
私が救われたのには理由があるはずと
ひたすら自分の運命を待ち続けた

今では、遠い昔のように感じる
私は、母なる地球に力強く根付き
太陽の光に祝福される

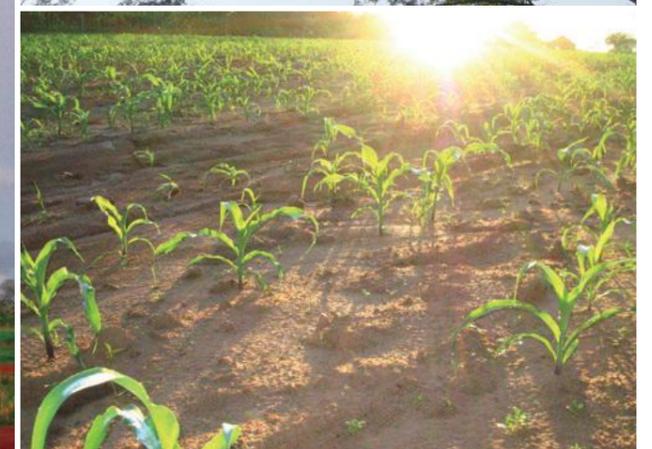
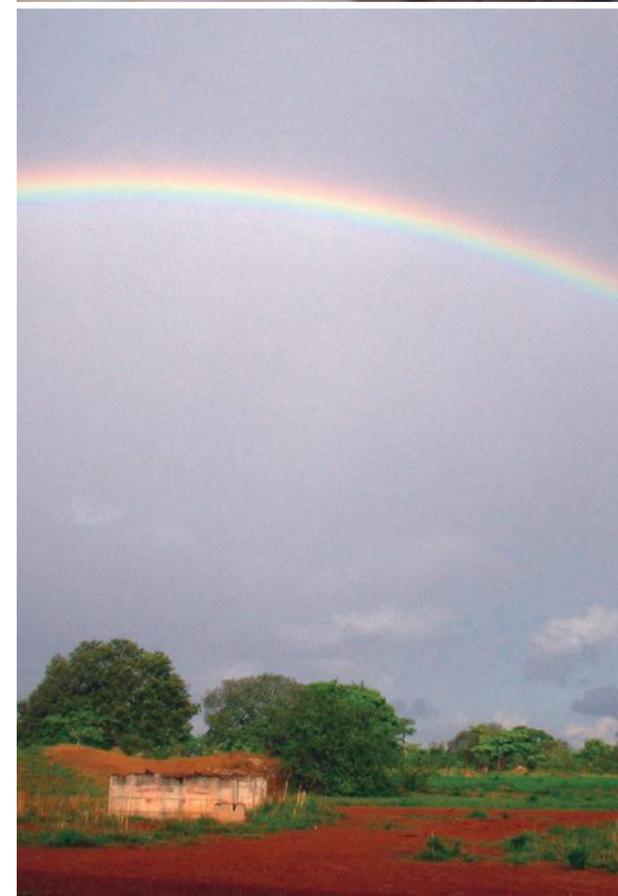
私は辛い日々を振り返る、仲間たちの生と死
私はしっかりと立つ、自分が生き延びたことに驚きながら

H14の種子、いじめっ子たち、世界を救うと定められたものたち
彼らの大半は最初の干ばつとの戦いの中で失われた
焦げつくような熱にしおれてしまった
他の者は、私たちの大地を嵐が駆け抜けたときに倒れた
わずかに残ったものは弱々しく、病弱で、継承する遺産もない

兄弟たちはもう、私のことを小さな種子とは呼ばない
彼らはもう、私をからかわない
私の大きな体は、彼らの上にそびえたち、
そのいくつかに影を落とす
私は深く根を張る
私の強さの奥には、あの内なる光がある
小さな種の時に、うち消されることのなかった、あの光が

私は干ばつを生き延びた
嵐に向かって力強く立ち
害虫との戦争に奮闘し、勝利した

今、私は兄であり、父であり、母であり、与える側である
実らせる果実は、栄養があり、それを食べる人を強くして守る
私の遺産は私の小さな兵士たちに受け継がれていく
ああ、私の小さな種子たちよ！





自然農法ショー
 10th Anniversary
 フォトギャラリー



美しい村を The Colors of Cultures

～自然農法 ザンビアプロジェクト11年のあゆみ～ 加藤 光成 (Shumei スタッフ)



南十字星と流れ星

「歓迎の歌が響く中ふと空を見上げると、今まで見たこともないような美しい星空が広がっていました。大自然の中、美しい空、美しい歌声を聞いて、自分が心のどこかで求めていたものが見つかった気がしました。それと同時に人間の原点や幸せにたどり着いた気がしました。この人たちがこの心のまま物質的に豊かになったら、日本の人たちがこの人たちのような心を取り戻すことができたなら、幸せな世界ができるのではないかと思いました。」(今回ザンビアを訪問したある青年の感想)

8月17日、第10回自然農法ショーが開催される前日、日本の青年たちとスタッフを含む40名を乗せた2台のバスとSUV車は、予定よりもかなり遅れて自然農法ショーの開催場所であるムババラ地区プロジェクトサイトに到着

しました。既に辺りは暗闇に包まれてからかなりの時間が経っていました。到着するや否や暗闇にまぎれて、歓迎の歌声が聞こえ始めました。車のヘッドライトに照らされながら踊る女性たち、感激と興奮の中、日本の青年たちも踊りに溶け込み、80人あまりのダンスの渦となりました。「待っていてくれたんだ」。



プロジェクトを振り返って

2005年10月以来、今回で5度目のザンビア訪問となりました。ザンビアは、南半球なので季節は冬です。夜は多少肌寒いものの、日中は、結構暑くなります。夜は勿論、北極星ではなく、南十字星が輝いています。今年自然農法ショーは、10周年を迎えるムババラ地区に自然農法ショー3年目のチカンタ地区、5年目のペンバ地区が合流して行われました。

この自然農法プロジェクトは、ムババラ地区だけで行われていましたが、2009年から2つの地区に加え、2011年からは、3つの地区で行われるようになり、それぞれの地区で自然農法ショーが開催されるようになりました。

ザンビアでの自然農法プロジェクトは、女性農民の援助から始まりましたので、最初は女性が主役でした。私自身覚えているのですが、初期の頃は、各組合のミーティングに行くと、必ず後ろの方で男性たちがじっと静かに見ているのです。今ではミーティングに行くと男性も参加して歓迎してくれます。コミュニティー全体でプロジェクトに参加しているという雰囲気になっています。

また、確実に自然農法を通して彼らの生活が変わってきています。10年前は、1日1食がやっとだった食事も、3食頂けるようになりました。よくShumeiの訪問時に運転手を務めるトビヤス・ダンボは、母親の生活の変化を私たちに語っていました。

ムババラのプロジェクトサイトでは、ゲストハウスやキッチンホールなどの施設が整っており、この10周年に合わせたかのように、電線が引かれ電気が通りました。数年前には道路もきれいに整備されて、首都ルサカからこのプロジェクトサイトに来る時間も大幅に短縮されました。この11年間でいろいろなことが大きく変わりました。

また、町や村の人々の生活も劇的に変わりました。今や携帯電話は必需品で、電気がないような田舎でも、電話会社の広告が街のいたるところで見られ、皆が携帯電話で話している姿は、なんとも不思議な感じがしました。今回聞いた話ですが、この辺の地域の家には必ずトイレがあり、衛生的に整っている地域だということでした。こういった地区は珍しく、モデル地区として国連関係の訪問者が多いそうです。そうした訪問者のためのゲストハウスやレストランの運営で、組合に収入を得る計画を立てています。



子どもたちを主役に

8月17日、自然農法ショーの前日には、ペンバ地区の学校のオープニングセレモニーがありました。完成は予定より遅れましたが、記念すべき第10回自然農法ショーに間に合わせる事ができました。窓と屋根はShumeiからの援助ですが、それ以外は、このペンバコミュニティーの方々の努力ででき上がりました。この校舎は、保育園の2クラスで、今後、1年ごとに校舎を増やしていき、初めにこの校舎に入る子どもたちが卒業する7年後に学校が完成される予定です。今回、日本から絵本とピースフラッグが送られました。ザンビアでプロジェクトを担当するアラン・今井は、オープニングのスピーチで、「この学校からさらに上位の教育を受け、ザンビア大学に行き、また地元に戻って地域に貢献する人材を育て、コミュニティー全体でサポートしていこう」と力強く語りました。

第10回自然農法ショーは、8月18～20日の3日間、例年のように未明から踊りが始まり、夜が更けても続き、彼らの情熱と祈りがほとぼしっていました。自然農法ショーは、ザンビアの人たちが自分たちの誇りを取り戻せるように、単なる自然農法の収穫祭ではなく、ザンビアの伝統文化の復興を助けたいというアラン・今井の思いから始まったイベントでした。今年自然農法ショーは、今まで別々に行っていた3地区が一堂に会し、参加者は3,000

名を超え、また日本からも33人の青年たちが加わった、かつてないイベントになりました。日本の青年たちは、サッカーやネットボールに参加、カレーライス、ザンビアの伝統的な主食であるシマに、みたらしのたれや、きな粉をつけて団子にしたもの、自然農法のお茶を振る舞いました。また、子どもたちが楽しめるように縄跳びなどの遊びを用意して、今まで脇役だった子どもたちをも主役にする事に成功しました。ザンビアの農村の人たちにとって、子どもは大切な労働力で、それ以外の認識はなく、大人たちは自分たちのことだけで精一杯で、これまで子どもたちが主役となり楽しめるイベントはほとんどありませんでした。しかし、こういった認識が少しずつ変わりつつあります。



校舎の全景



校舎の内部

支援の鍵、待つことの価値

開発途上国の支援活動は数多くありますが、ザンビアでのShumei自然農法プロジェクトの特徴は、3年や、5年でプロジェクトを区切らずに長い目で支援を継続していることです。このムババラでのプロジェクトは、4年程前に組合役員などの初期の主要メンバーが総入れ替えするなど難しい時期もあったようですが、実際に11年間も続き、2005年、2008年の大きな干ばつを乗り越え、その度ごとにお互い絆を太くしてきました。そして成果の足跡を確実に残しています。

そこにおける非常に大切なカギは、やはり中心となるスタッフや各実施者たちのそれぞれの中にあるプロジェクトに対するオーナーシップ（所有感）に、少しずつですが、責任と自信と知識、経験が財産として積み重なっていき、ザンビアの農民たちが、自分たちのプロジェクトであると思えることである、と改めて確認しました。そして、これが実際に地元に根付き、自分たちだけで立って歩める時まで、最低限のサポートを続けることが大切です。もちろん、サポートする側は、先進国の豊かさを享受しているもの、お互いの責務を果たす意味では、同等の立場として、歩調を合わす必要があります。

2年前の自然農法ショーは全体としてまとまっていなかったという声がありました。バーバラにこのことに関して聞いてみました。以前は、バーバラが全てに関わらないと物事が進みませんでした、新しいプロジェクトも増えてきていることもあり、ここ数年、現場のスタッフにプロジェクトを任せていました。その年は例年に比べバーバラは関わっておらず、現場のスタッフが自分たちのプロジェクトとして誇りと責任を持って準備にあたった結果なので、ベイベーステップだが、そこを評価してほしい、と言っていました。

今後、プロジェクトサイトに第2、第3のバーバラを作っていく必要があり、少しずつですが、現場において後継の人たちが育っている印象を受け、今回の自然農法ショーの準備運営に至っても、確実にキーパーソンが増えている印象を受けました。支援は、「待つ」ことが必要です。彼らの自立をじっと、赤ちゃんが歩くのを待つように……

アラン・今井は言います。「この国での開発は、非常にゆっくりです。自分で現地に行って各々のプロジェクトを指示した方が早いと何度も思いました。アメリカや日本のような先進国と比べると、途上国における開発は、驚くほど

ゆっくりで遅いのです。本当に多大な辛抱強さが必要なのです。しかしながら、待つことに本当の価値があると気付きました。ですから、このプロジェクトの10年間の発展の結果は、彼ら、ザンビアの人々の、血や汗や涙の結晶なのです。」ザンビア共和国は、昨年独立50周年を迎えたばかり。いわゆる先進国に破壊され、翻弄された国の一つです。しかしながら、ザンビアは世界平和指数ランキングで158カ国中51位（2012年）となり、アフリカで最も平和な国として評価されている国でもあります。

心の豊かさ

今やムババラ地区プロジェクトサイトにおいても、スマートフォンさえあれば、動画などが見ることができる時代、どこにいても表面的には繋がることのできる時代です。この開発の波を止めることはできませんし、先進国の物質的な豊かさにどっぷりと浸かった私たちに、これは良くない、などと言う権利はありません。選択権は彼らにあります。鍵は、心の豊かさを失わないまま、物質的な豊かさを享受できるか？ というところにあると思います。冒頭に引用させていただいた一人の青年の感想に、ふと立ち止まり、考えるのです。

「この人たちがこの心のまま物質的に豊かになったら、日本人たちがこの人たちのような心を取り戻すことができたら、幸せな世界ができるのではないかと思います」。



SNN北海道センター 第4回セミナー 「食から美来へ」^{みらい} ヴァンダナ・シヴァ博士特別講演

平成27年8月9日、酪農学園大学、黒澤記念講堂にてヴァンダナ・シヴァ博士、奥田政行シェフをお招きし、SNN(秀明自然農法ネットワーク)北海道センター主催、秀明インターナショナル共催による第4回セミナー「食から美来へ」を行いました。

第1部 奥田政行シェフ 講演 「料理の自然環境」



おくだ まさゆき
奥田 政行

山形県鶴岡市生まれ。2000年イタリアン、アル・ケッチャーノを開業。食の都・庄内親善大使。イタリアスローフード協会国際本部主催「テッラ・マードレ2006」で、世界の料理人1000人に選出される。農林水産省より第1回料理マスターズブロンズ賞を受賞。ほか、世界各国の会議や世界大会、大使館主催イベントなどで料理を担当。サンマリノ共和国より「食の平和大使」に任命。

今回、おそらく“食べ物が一番未来につながる”ということで講演を頼まれたのだと思いますが、私は今まで“食べ物”という魔法を使って山形県の庄内という地域を元気にしてきましたし、他の地域でもそのようなことをしています。その根本は、地球からのメッセージを聞いて、料理という形にする。そうやって地域を元気にしてきました。どういうことかと言うと、それは今の水、光、大気、土の状態を読みときます。そしてそれらの無機質なもののから、人間が食べられる状態にしてくれるのが植物です。それをひとつの地点で毎日、生で食べて、今地球がどんな状況になっているのか、どんなメッセージを出しているのかを予測します。私たちが住んでいるのは人間界ですから、その植物界のメッセージを人間社会にどうやって伝えていくか、ということをやってきたのが「アル・ケッチャーノ」の料理です。

何もないところから始めた地域づくり

私は21歳で一億三千万円の借金をかかえて住むところを失いました。そのとき鶴岡市が助けてくれました。それで食べ物で恩返しをしようと、この土地でレストランを始め、それから繁盛店を作ってきました。繁盛店を作るのは難しいようで、実は案外シンプルなんです。その時代に人が求めていることをすればいいのです。例えば、人がイタリアンを求めてなければ、中華でも蕎麦屋さんでも私はやります。常に自分がそういうことをできるように修業と修行をしているので、今はイタリア料理の料理人ですが、時代が変われば中華の奥田政行になっているかもしれません。

アル・ケッチャーノがオープンした2000年当時は、日本の料理界は、「フランスやイタリアの野菜が一番おいしい」、「日本の野菜は全然味が無い」と言われていました。それは慣行農法の野菜が多かったからです。その当時レストランに食べに行くというのは、異国の文化を味わいに行っていたのです。ですから、家具や絵画等の調度品も置いている店に、フラン



会場となった酪農学園大学 黒澤記念講堂

スの雰囲気と味を求めて、ミシュランの三ツ星の味などを求めて行っていたのです。そのとき、アル・ケッチャーノはお金がなかったので、調度品もない地場イタリアンをしていて「お前は日本の野菜を使って日本料理をしている、アホじゃないのか」と言われました。東京で修行を終えて田舎にUターンするときには、「都落ちだ」とも言われました。

その当時は「地元の食材がそろわない」が常識でした。なぜかと言うと、昭和37年からの池田内閣の日本所得倍増計画で、全国の地方で採れた野菜を東京の大田市場に持って行き、違う産地の野菜を積んで帰ってくると、地方と中央の農協や問屋さん、ガソリンスタンド、途中のドライブインにもお金が入る。そして道路網をどんどん進めれば建設業も強くなる、そういうことをしていました。そこには人に良いこともあれば悪いこともありました。アル・ケッチャーノが開店した2000年当時、私は理由が分からないまま、なぜ目の前に生えているレタスがあるのに、他県産のレタスしか手に入らないのだろうと、そういう疑問から、まずは自分で野菜やハーブを育て始めました。すると毎日草むしりで終わってしまい、料理が

できなくなってしまいました。

それでどうしたかと言うと、プロフェッショナルな生産者のところに行って、物々交換をしました。当時は農協の方が力が強かったので、お金で交換するといじめられました。ですから、この生産者は日本酒が好きだなと思ったら日本酒と、この生産者は米沢牛が好きだなと思ったら米沢牛と交換しました。ここで気付いたことは、米沢牛はお店で仕入れれば、100g800円です。百貨店に行くと100g1,500円。800円で野菜を仕入れて800円分の米沢牛を渡すと、生産者の方は700円儲かります。アル・ケッチャーノで仕入れた1本800円の日本酒が酒屋さんに行くと1,200円で売っているとします。800円分の野菜をもらって、800円で仕入れた日本酒を渡すと、生産者の方は400円儲かったことになります。その結果、安く料理をお客様に出せて、お客様にも、経営的にも、生産者にもいいという三方良しということが分かりました。私は実家を無くしているので、お金の怖さを知っています。お金の正体がだんだん分かってきました。



アル・ケッチァーノ



アカネギの生産者



フジサワカブの焼き畑風



自分の料理の出発点が変わった

地元のいろんな野菜が集まってきて、最初の壁をクリアしたら、「地元のものがおんなにおいしいのか?」と言われました。じゃあ美味しくすれぱいいとシンプルに考え、1本28円のアカネギという在来野菜を栽培している生産者の方々と一緒に、畑の中から世界基準のおいしいネギを見つけて、この種子を選抜育種していったら、3年後にこれがおいしくなって、今1本280円です。ある集落の何の変哲もない家の片隅に植えられていた在来作物のネギでした。それまでの農協主体の形のそろった輸送に向く野菜から、料理人が食べておいしいと思ったものを、生産者の方に伝えて、その「おいしい」というところから野菜を作り始めました。

だから野菜を作るとき、どっち向いて誰のためにどんな野菜を作るのかということを考えると、栽培方法が変わります。それは私たちが作る料理も同じで、どっち向いて誰のためにどんな料理を作るのかというところを突き詰めて考えていくと、自分の料理のスタイルが変わります。自分の評価のために自分の料理を作れば、その人の顔が料理に出るし、ミシュランで星をとるためにミシュランが好きそうな料理を作ろうと思えば、そういう時代を読んだ料理になります。生産者から頂いた野菜も、自分の気持ち次第でいろんな形に変わります。モノっていうのは全て、自分の気持ちの化身だと思うんです。ナイフもフォークも鉛筆も全ては人の考えからの化身としてのモノ、形です。私は生産者の方と庄内を向いて、庄内の生産者のために料理を作りました。誰でも作れるシンプルな料理にしてレストランでお出ししました。その結果、みんなが真似をして、アカネギがレシピ付きで売れるようになりました。そうしたらアカネギの番組ができて、百貨店で売れるようになりました。そうしてアカネギは化けていきました。

すると今度は「地元のもの全て安全で安心な訳ないだろう」という壁を突き付けられました。ちなみに私は顔がかわいいから、いじめられやすいんです。でもいじめられると、反骨心からそれ

を無理だと思わずに必ずクリアしてきました。そのときに見つけたのが、この在来作物です。日本に農業が広まったのが太平洋戦争の後ですから、その前に庄内の気候に順応した野菜を探していたら在来作物がありました。最初4つしか知りませんでしたが、新しい野菜を見つける冒険の旅に出たら、70種類もありました。そしていつの間にか、「よみがえりのレシピ」という映画ができて、山形県の庄内は在来作物の聖地になって、このとき一緒にやった江頭教授は在来野菜界のスーパースターになりました。これも全部食べ物が出てくれた魔法なんです。

当然、イタリアンの在来作物用のレシピというのはありません。ほとんどの料理本のレシピは、東京に輸送された野菜を、どうおいしく料理するかというもので、その当時は慣行農法の野菜用の調味料を多く使ったレシピでした。ですから本に載っていない地元の在来作物の場合、その野菜を食べてから料理を考えました。すると世界に一つだけの在来作物で、自分のオリジナルの料理ができる。そうすると世界に一つだけの料理になります。そして日本中とか、海外からもお客さんが食べに来るようになりました。自分の料理の出発点を、イタリア料理・フランス料理から考えるのではなく、素材から考えるようになりました。

野菜というのは何十万種類とあって、自分の寿命が75歳だとすると、野菜の一つ覚えるのに一週間かかるとします。すると一生かけても野菜を全て把握するのは無理だと分かりました。そして水と土と風と太陽が野菜に与える影響を勉強していくと、物事の原理原則が分かってきました。そうすると感覚で見ると、この畑の小松菜は苦いとか、この畑の小松菜は甘いと分かるようになりました。これは地球を構成する要素の水と土と大気と光と物質と同じだということが分かり、そんな中で、自分は何のためにこの世に生まれてきたのだろうと考えるようになりました。その頃の私は借金地獄でしたが、人間、生活が苦しいと深く考えるんです。そ

して自分は人と人を結び付ける役割、大地と人を結び付ける役割のためにこの世に生まれてきたんだと思ひ込んだのです。そうすると魂が変わって、自分だけの料理スタイルができ始めました。

料理を作ることで 庄内の食材の素晴らしさを知った

そして、私の生まれ落ちた庄内という地域は「食の都」になれると思ひ、地元のコミュニティ新聞に文章を書きました。中学校のころ成績は県で下から数えて2ケタだったのですが、自分の魂が変わったら、文章が書けました。そしたら起承転結ができなくて、面白い文になりました。そして「食の都」を作るために奥様方に地元の野菜の料理講習会をやりました。地元の在来作物を、新しいイタリアンという形で奥様たちが料理する。ただ作るだけではなく、その作物が未来に残るような料理にしていきました。また、おばあちゃんたちには、庄内の地形の秘密、庄内のおいしいものが食べられる自然の秘密について話しました。共働きの家庭が多いので孫に話すのはおばあちゃんたちです。そうすることで、子どもたちが地元で食べ物に興味を湧き、その結果、将来この地域に食材が残る。そうしているうちにこの地域にスーパーシェフが現れて、この地域が元気になるというイメージでした。私は人間社会では実家の借金問題でブラックリストに載っていたので、闇にいるしかないから、ある程度までしかいけないう人だとわかっていました。

しかし、そんなとき、山形県に無登録農業問題という大きな問題が起きて、毎日の全国のトップニュースに取り上げられ、自殺者も出てしまいました。そのとき、どうにかしなければと思ひ、山形県の悪いイメージを「食の都・庄内」を作って良くしたい

と、食の都・庄内の設計図を紙に書いて行政に持って行きました。そうしたら「食の都・庄内」の親善大使になっちゃったんです。「奥田さんあなたがやってください」と。ただこのとき、うちの実家は負債があってブラックリストに載っていたのに、いきなり親善大使になったんです。行政に行けば、その長と「これからの山形県はどうする」という話をし、家に帰ると同じ長の名前で督促状があるという状態でした。そんな中、この大きな問題を解決するために、暗くなってしまった山形県を救いたいと地元の本に連載を始めました。するとその本を見た全国紙が庄内の食の連載をしてくれました。そうして連載に合わせて自分の料理を進化させていったら、有名雑誌の「クロワッサン」が連載をしてくれることになりました。自分の暗い過去とは、裏腹にどんどんどんどん、メジャーになっていきました。精神的にはかなりきつかったのですが、それでも山形県のためにやらなきゃいけないって思いました。でも本に出ると必ず借金取りがやって来ます。「情熱大陸」に出たときも、「庄内の自然をきれいに見せてください」と出演OKしたのですが、全国版なので放映後、大変なことになりました。そして鬱にもなりました。

そんな自分とは裏腹に名前はどんどん世の中に出て行きました。そしてついには「ズームイン朝」の秋のうまいもの祭りという生番組に出演して、司会者の方が「山形の食べ物、うまいね!」と言ってくれました。そのときに私はこれで山形県の無登録問題は終わったと思ひました。今、食べ物のおいしいところと言えば、山形県が北海道と肩を並べるまでになりました。まだ追いついてはいませんが、近くまでいっています。私が「食の都・庄内」と言い始めたことで、今、町中に「食の都・庄内」という旗がたなびいていて、空港も「おいしい庄内空港」と名前が付きました。食べ物で町が変わったんです。そしてなんと鶴岡市はユネスコの食文化都市になったんです。世界のユネスコにまで認められたんです。そのときに何

が一番になった材料かという在来作物なんです。このF1の種じゃなくて、自家採種している在来作物が日本で一番多いところということで、在来作物が柱になって、日本初の食文化都市になりました。世界で6番目の食文化都市です。

食材が良ければ、塩味だけでおいしい料理になります。土ができあがった畑の自然農法の野菜は塩味だけでおいしいです。のど越しも良いので調味料はいりません。食材が悪いと甘味や酸味やこげ味等を付けていかなければならなくなります。私の住む庄内は食材が良いので私の店では調味料はほとんど使いません。塩とオリーブオイルだけです。

レストランは農林水産業を社会に伝える最後のメッセンジャー

東京の山形県のアンテナショップの中にレストランを開店しました。銀座に庄内の食材を送って料理にして宣伝しました。田舎でいくら食材を作っても全ては消費できないので、大量消費地の東京にあるアンテナショップで食材を使ってもらおう。東京は物も情報も食べてしまう大消費地なのです。

また生産者の方には、その当時グリーンシートとって、うちの店の料理は全て無料で食べられるようにしました。うちに野菜を入れてくれる生産者の方への特典です。おもしろかったのは、トノジマキュウリってキュウリが絶滅寸前でした。レストランに、地元の広告会社の方や生産者、カメラマンや行政の方などを呼んで、ここでキュウリをみんなで食べて、ワインを一杯飲ませて、キュウリの将来を話しして、「支長、あのキュウリがもう絶滅しそうです。来年予算つけてください。パンフレットはこの広告会社の方が作ります。写真はこのカメラマンで」と言ったら予算が付きました。レストランというのはいろんな業種の方が集まる集会所でもあるんです。

私は店と家を無くした父と母のことを思ったとき、人間の最低限必要なものがわかりました。そうして言えることですが、男性が男性らしくあるためには、「夢」と「誇り」を語れなければいけない。女性は「安定」と「日々の小さな幸せ」。実は、レストランと生産者の方でその四つを共有することができます。「食の都」を一緒に作りましょうと夢を語って、その夢を持っていただく、私の店にマスコミの方が来たら畑に連れて行く。世の中でマスコミの方に一番取材を受けるのは飲食店なのです。ですから、必ずマスコミの方を、生産者の畑に連れて行き取材をしてもらいます。そして生産者に日頃のうっぶんを話してもらおう。そうするとマスコミの方はきれいな文章で活字に



してください。そしてグラビアになると生産者の方は、自分の中に誇りができる。そして人生の次のステージに行けます。女性の方にはきちんと収入を与えて、安定してもらおう。そして、レストランでケーキなどが残ったら生産者の家に家族分持って行きます。そうすると女性は日々の小さな幸せができます。

フジサワカブという在来作物を焼き畑でたった一人の生産者が作っていました。それを焼き畑風というオリジナルの料理にしたら、これだけで毎年秋に、アル・ケッチャーノに観光バスがやって来るようになりました。その畑を見てアル・ケッチャーノでその料理を食べる。看板メニューがあるということは、すごいんです。観光ツアーになっているんです。だから、食べ物というのとはとてもなく恐ろしいことができるんです。

レストランというのは、農林水産業を社会に伝える最後のメッセンジャーだと思っています。今、庄内の生産者の方と、在来作物518種類を自家採種で作っています。ここで、来年は「アル・ケッチャーノガストロノミー」というのをやろうと思っています。これは5年以内に日本の若い力を畑に入れていくためと、オリンピックに日本の野菜を入れるためと、近年の野菜の影響で弱くなってきた男子をもう一度、男らしくするための試みなのです。

第2部 ヴァンダナ・シヴァ博士講演 「未来と大地をつなぐ種」



ヴァンダナ・シヴァ

インドのデラドゥン生まれ、カナダのウエスタン・オンタリオ大学で物理学および科学哲学の博士号を取得。1987年、生物多様性や種子の保全、有機農業を推進する団体ナヴァターニヤを設立。1993年、もうひとつのノーベル賞とよばれる「ライト・ライブリフッド賞」、はじめ、各国で環境関連の賞を受賞。世界の農民や環境活動家に大きな影響を与えている。

今日は、皆さんご存じのとおり、長崎に原爆が落された日です。その悲劇を思うととても胸が痛みます。まさに戦争が引き起こした悲劇です。しかし、今同じように、農業というものが、私たちの味覚を壊し、食の安全を壊し、社会生活をも脅かす状況をつくっています。戦争と同じことが農業の世界にも起こっているのです。軍事産業と農業の関わりですが、実は今、慣行農業で使われている多くの化学肥料や農薬、除草剤などは、全て軍事産業からの転換によって造られたものです。第2次世界大戦で爆薬などの研究に使われたテクノロジーが、今の農薬などに生かされているのです。例えば、ユダヤ人収容所で使われていた毒ガスが農薬に、ベトナム戦争で使われた枯葉剤が除草剤に使用されています。そのように多くの軍事産業が現代では化学薬品に変わっているのです。そして、それは化学薬品だけではなく、例えば、漁業において網で海底を根こそぎ取る方法は、地雷除去の方法が転換されたものです。初期の頃の畑を耕すための機械も、戦車から応用されたものだと思います。戦争が終わったことによって行き場を失った軍事産業が見つけた市場が慣行農業だったということです。

奥田シェフもおっしゃっていましたが、作物は大地のメッセージを私たちに伝えているのです。しかし、私たちが大地と調和を保てなければ、そのメッセージを受け取ることはできません。元々殺人行為のために発展した軍事産業を転用して作られたものが、大地に調和をもたらすはずもなく、私たちの身体や生命、そして人間社会に健全なものをもたらすとは思えません。なぜなら、これらは全て暴力、殺傷しか生み出さないということが根底にあるか

らです。本来私たちは何かを創造する力を持っているのです。創造性を生かして、素晴らしいものを生み出してきたにもかかわらず、現代人はこの暴力行為を新しい、素晴らしいものと錯覚しているのではないのでしょうか。

私が農業の世界に入ったのも、まさにこの暴力行為が農業という名の下に、私たちに襲いかかってきた現実を目の当たりにしたからです。1984年、インドのボパールで大変な事故がありました。農薬を作っている工場が大爆発し、3000人が亡くなり、その後も後遺症などで何千人の方が亡くなりました。その当時、緑の革命という名の下に大変なことが行われていました。これは決して革命ではありません。自然に根ざしたインドの農業地帯に農薬や化学肥料を持ち込んだのです。当時私は国連の自然資源についての会議に参加していたのですが、インドのパンジャブ地方



空中からの農薬散布



で行われている緑の革命を見て、農業に異変が起きていることに気付いたのです。そして調べて分かったのは、大地が侵され、水が汚染され、農家の方々の生活が一変し、周りの自然環境も影響を受けていることでした。

今、植物の受粉を助けるハチが激減していることも、この緑の革命の影響からです。その当時、化学肥料や農薬を使用しなければ、世界の飢えを救うことができなくなると言われていました。今は※ GM 作物が無ければ世界中の人々の飢えをしのぐことができないと言われています。今世界では10億人が飢えに苦しんでいます。そして、20億人は食が影響する病で苦しんでいます。この状況を見ると、今の農業が本当に飢えを救っているとは思えません。結局、農薬や化学肥料によって、もっと多くの人々が飢えているのです。

GM 技術では、全く違う細胞をひとつの生命体に打ち込む作業が行われています。本来の自然界では絶対に交わることのない遺伝子が混じるわけです。どのように混ざるかというと、当然自然界では起きないことを、ジーン・ガンと呼ばれる注射器で、まるでピストルで打ちこむように、別の細胞に打ち込むわけです。これが暴力ではないと言えるでしょうか。当然、全く違う遺伝子を野菜などの食べ物に入れるわけですから、人間の体でも全く違う異物が入れば拒否します。同じように、植物でも拒絶反応が起こり、

※ GM : Genetically Modified、遺伝子組み換え

それを押さえ込むが必要になります。GM を推進している人たちは、違う遺伝子を組み換えることで最大限の効果を得られるといますが、実際はそうではなくて、その拒絶反応を抑えるために、抗生物質や、新たな遺伝子を活性化させるためのウイルスを入れるのです。そうしないと効果が発揮できないのです。ですから、いろんな毒素を入れ込んでいるわけです。GM 作物には、毒素そのものが入れ込まれています。毒によって遺伝子が変わる、まさに私たちは毒そのものを食べているということです。

また、除草剤に耐性を持つ作物も同じことです。それは安全には程遠い食べ物です。本来、世界中で GM 作物の安全性をテストする、検証するための規制が必要なはずですが、どのような規制をするかという会議に私は参加しました。生物多様性を守るため、動植物の環境保全、人々の身体の安全、使用する農家の方々の社会的・経済的な健全性などを確保するための枠組みが義務付けられています。しかし、実際は本当に安全性を考えられたものではありません。例えば、インドでは GM 綿花が栽培されていますが、栽培が始まってたった4年で信じられない数の有益な微生物が死滅してしまいました。作物の生産過程において約30%は受粉作業が必要となりますが、その受粉作業を担っているチョウやハチは、生物多様性のある環境で受粉が可能となります。1500種の生物が生息している場所では、

遺伝子組み換え作物商業栽培国(29カ国)

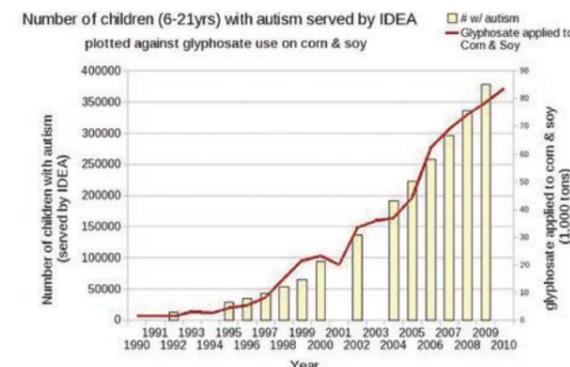


普通の森林の6倍の受粉作業が起こっていることがわかりました。しかし、GM 作物の圃場では、たった一つの受粉作業も起きないのです。なぜならば、受粉作業を担う生物が死滅してしまっているからです。すでにアメリカではハチの75%が死滅してしまいました。BT 綿花は毒を持っており、その受粉作業をしてくれるハチを殺してしまうのです。ラウンドアップという除草剤は、あらゆる雑草を駆除する力がありますが、そのラウンドアップにも耐性がある作物が GM で作られました。そして、その作物を食べた多くの生きものや虫たちが死滅しています。ある場所では、そこに生息しているはずのチョウが全く生息していないという状況に陥っています。GM 作物は、わずか20年前に現れました。すでにアメリカでは食料として市場に出回っており、GM 作物を食べている人々がたくさんいます。日本やヨーロッパは、基本的には GM 作物の輸入は禁止されていますが、家畜などの飼料には GM 作物が含まれており、皆さんも間接的に食べているのです。インドでも綿花は GM ですが、野菜などの食べ物には GM は入っていません。

この20年の間に、アメリカではとんでもないことが起きています。ラウンドアップという除草剤は、本来雑草だけを駆除し、作物には影響がないといわれていました。しかし、調べてみると、少量ですが赤ちゃんのミルクやその

他の食品にも残留していることがわかりました。その影響で、ガンになる人が増えているという研究結果が出ています。さらに GM 食品が導入された20年前は、アメリカで自閉症の子どもは約10万人に1人でした。しかし、5年前には65人に1人、2年前には35人に1人、2025年には2人に1人の子どもが自閉症になるだろうと言われてい

ます。私たちの内臓に生息する本来有益な細菌は栄養素を脳など体内に循環させてくれる働きがあります。しかしラウンドアップ残留作物を食べることでこの働きが阻止されます。有益な細菌はアミノ酸を脳に送る働きをしますが、このアミノ酸が排出されなくなってしまいます。それにより、脳が活性化せず、子どもたちの自閉症が起き、



またアルツハイマーが爆発的に増加しているのです。残念ながらアメリカでは、GM作物の安全性を検証する動きが全く見られません。アメリカでは、GM作物は、自然な作物と全く異ならない、正常な食べ物と認識されており、検証する必要がないと考えられているからです。これは、全く非科学的な根拠によって主張されていることですが、彼らはそれを科学の名の下に、GM作物と自然の作物には全く異なる点はないと言っているのです。アメリカの人々は20年間GM作物を食べ続けたために、何よりも私たちが大切にしなければならない次世代の子どもたちに影響が出ているのです。

例えば大豆に関しては、アジアや日本には約1万年前から大豆が存在しますし、大豆そのものが素晴らしい進化を遂げていますが、ほんの20年前に現れたGM大豆というのは、本来の自然の大豆が持っている要素は全く含まれていません。アメリカの学会で検証された結果によると、私たちの体の中で起きる有益なサイクルを阻止しているのがGM作物なのです。本来ならば私たちの体内では有益なバクテリアは活性化し、害のあるバクテリアは抑制されているのですが、その働きが阻止されていることが実証されています。自然を尊重する栽培法で作られた作物は、大地から平和や調和などのメッセージを私たちに伝えています。しかし、GM作物は、暴力や殺傷などのメッセージを伝えているのです。GM作物を作る人々は、何千年、何万年前から地球に生息する作物と全く変わらないという主張をしますが、いざ特許権になると、「いやそうではない、これは私たちが作り出したものだから、特許使用料を払わなければならない」と、急に態度が変わります。本来ならば、GM作物は毒素を遺伝子に打ち込んで環境を汚染しているのだから、それに対する賠償金を払ってもいいはずなのにGM作物を作る人々は逆に、特許権を主張し、「勝手に使用することは盗みにあたる、それを使用するにはお金を払え」といいます。

カナダの菜種を栽培している農家は、全くGM作物を栽培していなかったにも関わらず、そこにGM菜種が生息していると訴えられて、賠償金を請求され、大変な目にあっています。大豆を日本で育てる農家、インドで綿花を栽培している農家、その人たちにとってその作物は元々あるものだから、特許などは関係ないはずですが。しかし、モンサント社は、そういう農家に特許権を支払えという訴えを起こしています。インドではそれによって、今まで安価に手に入った種の価格が、とんでもなく高騰してしまいました。そのため、農家が種子を買えないという状況が起

き、30万人という農家の人々が借金などによって自殺するという悲しい事態に陥りました。種子は命の源です。命を育む素晴らしいものです。種子は、私たちに地球のメッセージを送り、私たちの文化や未来を育んでくれる源なのです。この種子が、やさしい清らかな、農家の人々に愛されたものであれば、そこから育った作物は、私たちに美味や満足感、調和をもたらしてくれるでしょう。幸せで清らかな種子によって、私たちは幸せになれるでしょう。しかし、GM種子は、飢餓や病気など、負のものを私たちに与えています。GM種子のように、悲しい、汚された種子では、決して私たちは幸せになりません。

今、私たちが意識しなくてはいけない条約が検討されています。それはTPP(環太平洋戦略的経済連携協定)です。これは決して、日本、アメリカ、オーストラリアの国が話し合っているのではなく、モンサント社やその子会社、系列会社が結託して、何がこの世の中に必要なかを彼らが決めようと、秘密のうちに会合を重ねられています。TPPの中で食の安全性と私的財産の2つのトピックが検討されており、何をしようとしているかということ、調和化です。言葉はよく聞こえますが、要するに全ての基準を統一しようということ。例えば、食の安全性については、日本には日本の法律があり、基準があります。その基準がアメリカの基準にとって高すぎるというとき、TPPに加盟することでその基準は間違いなく下がります。調和化という名の下に、「みんな一緒にしましょう、みんなの基準を下げましょう」ということです。また、64カ国ではGM作物に対するラベルを貼る義務がありますが、アメリカではラベルを貼ることができません。さらに、上院下院では、私たちの知る権利を放棄させるような法案が検討されています。もしこれがアメリカで通ったら、国民は知る権利を失います。そしてTPPに加盟すると、日本人たちもその法律に従わなくてはならなくなるのです。調和という言葉は、本来とても美しい言葉です。多様性が調和を生み出します。いろんな要素が集まって、そこに調和が生まれるわけです。例えば、シェフは野菜を食べてその味とルーツを理解してはじめて、それをどんなメニューにするか決める。それは美しい、本来の調和を理解しているからです。ところが、TPPという調和は全く反対のものです。非民主主義であり、私たち一般市民の自由を奪うものです。知る権利もないし、多様性の中から選択することもできない。本来多様性を持っている美しさを奪うのが、TPPの調和です。もしTPPに日本が参加すれば、残念なことに将来の日本のお子さんの2人に1人が自閉症になるかもしれない



い。また、皆さんの3人に1人が肥満や糖尿病に悩まされるかもしれない。なぜなら、TPPによって、間違いなく今のアメリカの食スタイルが押し寄せてくることになるからです。今、日本には、日本らしい素晴らしい食文化がありますが、それが危険にさらされることになります。本来日本人は、大地や食や農業に繊細な感覚を持ち、素晴らしい自然観を培ってきました。日本人の伝統的な農業や、作物や大地に対する思いの積み重ねが、今の素晴らしい日本の食文化を創ってきたのです。それを、アメリカの人々に伝えていかなければならないのです。苦しんでいるアメリカの人々や農家の方々に助ける必要があります。清らかな種から育った幸せな作物を食べ、幸せな人とならなくてはならないのです。

今私たちに必要なのは、本当の意味でのパートナーシップです。TPPではなく、私たちが持続可能な社会を作るために、多くの人が多様性の重要性を理解し、文化の違い

から本来の調和を生み出す、そういう社会を作ることが必要です。そのためにはまず、大地との調和、地球との調和が一番肝心だと思います。地球を汚さず、大地の声に耳を傾けて、本来の自然の作物のあり方を推進していくことによって、本当の意味での調和が社会に生まれるからです。ぜひ皆さんも個人で、地球規模の素晴らしいパートナーシップを作るための活動を始めようではありませんか。そのためには本当の意味での多様性を理解して、みんなが作物を、種子を、食を分かち合える社会を作っていかなければなりません。ダーウィンの言葉にあります、私たちの地球は全ての人に恵みを、食を与えることができるのです。少数の貪欲な人々のためのものではありません。それを理解して、本当の意味での清らかな大地を作っていくためのパートナーシップを築いていきたい。全ての人がハッピーになれるための活動をしていきたいと思っています。



シヴァ博士×奥田シェフ トークセッション

司会：

これから、会場の皆さまから頂いた質問に基づいてシヴァ博士と奥田シェフのトークセッションを始めます。

シヴァ博士への質問：

日本に輸入されている飼料穀物のほとんどがGM作物とのことです。家畜や私たちにどのような影響を与えているのでしょうか？

シヴァ博士：

畜産に限らず、GM作物は、私たちに有益な細菌や微生物を殺してしまい、逆に病気を引き起こす微生物を増やしてしまいます。ラウンドアップのような農薬が使われることで、土中の有益な微生物が死滅し、それによって多様性のバランスが崩れます。作物を育てる土壌も影響を受けます。一つの例として、牛が自発的に流産してしまうといったケースがありました。それは、飼料に残留した

化学物質などの影響で子孫を残すことができず、その地域の酪農が崩壊してしまったことです。GM作物は、間違いなく私たちの体や土壌のバランスを崩し、本来備えている免疫力、耐久力を阻害してしまいます。デンマークの養豚家がGM作物を飼料として与えていたところ、脳が半分欠けているような奇形のブタがたくさん生まれました。そしてその家畜を食べた子どもたちにも、同じような奇形の子どものがたくさん生まれたそうです。この農家は「Denmark, ivy, GMO, Pork」というキーワードで、検索すれば見つけることができるでしょう。

また、たくさんの方がインターネット上でGM作物の害を事実として投稿しています。何が一番大切かというと、有機農業や自然農業など、自然界に一切化学物質を巻き込まない農業を推進していくことです。私は昨日、北海道のせたな町というところに行きました。そこで酪農家を訪ね、草原の草しか食べていない、とてもハッピーな牛に出会いました。見るからに幸せそうで、のびのびと大草原で生活し、人々との営みも、とてもほほえましい光景に見えまし

た。その牛の牛乳はとてもおいしく、アイスクリームも最高でした。その酪農家の活動によって、単に私たちが健康になるだけでなく、周辺の生態系全てが健全になり、そして体だけでなく精神的にもプラスになる、癒しの効果があると感じました。このような活動を推進し、国内総生産という生産高に惑わされることなく、どれだけ豊かなものが生産され、私たちがどれだけ恵みを受けるかを考える必要があります。そうすることによって、本当の意味での健全な身体と、健全な社会を作ることができると思います。

奥田シェフへ質問：

畑を見ただけで、どんな味の作物が育つか分かります。おっしゃいましたが、土を見てわかるのですか？ それとも作物と会話するのですか？

奥田シェフ：

土を見て雑草を見ると、ここにはどんな作物が向いているかが分かります。日のあたり方、朝日が当たるか夕日が当たるか、風の動きが大事で、植物はこのリズムで成長ホルモンが刺激されて、根っこが深く入っていきます。風が吹いているところ、湿度があるところ、そして朝日が当たるところを見ていく。だいたい湿度があるところは野菜が甘くなります。湿度がないと苦くなります。だいたいおいしい野菜は踊っています。先ほどの多様性と同じで、いろんなことが手をつなぐように、いろんな条件があるとよくなります。朝霧がかかっている、太陽が昇ると湿度がなくなって気温が上がる場所は、イチゴとかトマトなどの成り物野菜はとてもおいしくなります。ですから、トマトなどは川の中流などにあることが多いです。これを畑に行ったときに全部見えています。あとは、畑に入り、ふわふわとしていたら虫がいると分かるし、大きく息を吸って息が止まらなかったら、農薬を使っていないことが分かります。

司会：シヴァ博士が一言付け加えたいそうです。

シヴァ博士：

奥田シェフへ「作物と会話するのですか」という質問が出たとき、ぜひこれに回答したいと思いました。今一般的には自然をただそこにあるものとして扱いますが、本当に自然は生きていて、鼓動しています。自然は細胞が集まってできており、その細胞は常に動いていて、それが私たちにいろんな影響を与えてくれているのです。植物でいうと、根っこは植物の脳です。植物の中にある一つ一つの細

胞は、それが私たちの体内に入ったときに、私たちの細胞と会話しているのです。自然界では、その細胞同士の会話があちこちで起きているのです。だからこそ、奥田シェフが言うように見て分かるというのは、細胞同士がコミュニケーションを取っているからです。感覚として、中からも外からも分かるのです。生きている大地、地球、作物であることが、とても大事なのです。

奥田シェフ：

畑に入ったときに、目に見えるものを3割しか信用せずに、目に見えないものを7割信用すると、耳に聞こえないものまで聞こえてきます。おいしい作物や、よい畑というのは、不思議と生態系が整っていて、虫などもたくさんいて、周りにいる家族もみんな幸せなんです。これを僕は「妖精がいる」というのですが、周辺環境が整っていて、光る妖精のような、生命エネルギーがいるんです。

シヴァ博士への質問：

日本の農家も自分の食べる野菜に農薬はかけていないように、モンサント社のトップの方たちをはじめ、職員も実はGM作物を食べていないのではないですか？ 本当は体に良いものではないと理解しているのではないですか？ モンサント社と対立するのではなく、話し合いで解決でき





在来作物の種子

ないのでしょうか？

シヴァ博士：

もちろんモンサント社の幹部はGM作物を食べていません。彼らは自分たちのためにオーガニックの圃場を持っており、オーガニック作物を食べています。では、どうやって彼らと会話をすればいいのでしょうか？ モンサント社で働いている一個人となら、会話は可能です。私はこの10年くらい実際に彼らと会話を繰り返してきました。しかし、ここで忘れてはならないのは、モンサントという企業とそこで働く個人は、きちんと区別しなくてはならないということです。モンサント社という企業は、法的には存在するが、人間のように実体を持たないものです。しかし、今この企業がまるで実体を持つもののように、権利を持つとして、その権利を周囲に押し付けようとする動きがあるのです。

例えば、言論の自由は一個人に与えられたものですが、モンサント社は企業としてこの権利を主張しています。これはおかしいと思います。これを私たちがしっかり理解して、企業は企業として従わなくてはならない決まりごとをきちんと作っていかなければ、大変なことになります。TPPでも、モンサント社は投資家が国などを訴える権利を盛り込もうとしています。投資家すなわち企業が、国、

例えば日本を訴えるということです。日本政府が日本国民の安全を考えてGM作物の流通上限を何%と仮に決めるとすると、その取り決めによって利益が損なわれたとして、モンサント社が日本政府を訴えることができるということです。企業が国を訴えるということは、実際にアメリカで既に起きており、モンサント社は国や州を訴えています。マウイ島では一切GMOを阻止するという取り組みが出て、そのための法案も可決されました。そうしたところ、モンサント社がマウイ島を訴え、マウイ島側が裁判で負けそうになっているのです。

これと同じことが日本でも起きる可能性があります。もちろん私たちは個人レベルで対話して、一人でも多くの人が、有機農業や自然農法などの自然に即した生き方ができるようにしていかなければなりません。企業であるモンサント社には、私たちが組織的なレベルで、対抗できる法案で阻止するような働きかけをしていかなないと大変なことになると思います。

奥田シェフ：

そうすると、日本の美学が失われてしまうんですね。「悪いと思ったら、「すみません」と言える人になりなさい」と言われますが、「すみません」といった途端に負けてしまうんです。それから、灰色の美学もなくなってしまいま

す。日本人は時には黙って見過ごしてあげようというところがありますが、白黒ははっきりつけなくてはならなくなる。そうすると日本人が日本人らしくなくなってしまう時代になってしまうかもしれません。

司会：

何が安全か、“安全”という定義が変えられているように思います。今のアメリカの安全は、例えば肉に放射線をかけて完全に殺菌しないと安全ではないという。安全の定義が異なっているのです。そうすると、山でとってきた山菜は不衛生で安全でない、ということになるかもしれません。そういうことがTPPによって起こらないとは言い切れないのです。

奥田シェフ：

日本人は食べ物で、死ぬか死なないかというところがすごくおいしいと思っているところがあって、フグとかキノコとか、死んでも死んでも食べてきたんです。私もよく山菜採りにいって、間違っって毒草食べてしまって気を失いそうになったことがあるのですが、TPPになると、安全性ということで、フグがだめ、山菜がだめだとかいうことになります。私の店ではジビエはハンターから直接買っているのですが、それもきちんとした屠殺場でないとだめとか、だんだん変わってきています。

奥田シェフへの質問：

料理中に食材の違い、例えば自然農法や自然に根ざした農法で作られた作物とそうでないものの違いを実感するのはどんなときですか？

奥田シェフ：

自然農法などで作られた作物は、まず持ったときに質量が重い。細胞のきめの数が多いんです。細胞分裂するとき、しっかりと分裂して大きくなっています。慣行農法のは、ただ大きくなって、骨粗しょう症みたいです。持った瞬間にずっしりと重いのは、自然農法や有機のいい生産者の作物で、かじったときに、パキッといい音がします。慣行農法のは折ったときにボキッと簡単に折れてしまいます。そのように、まずは手に持って使い分けています。また、きちんとした自然農法の野菜は、噛んだときに水分があふれてくる、みずみずしい野菜になります。慣行農法の野菜はきめが粗く、食べたときに水がだらだらと落ちてくる、水っぽくなります。だから、水がはじける野菜なの

か、水が流れ落ちてくる野菜なのか、大きくはそこで見分けています。

あと体にいいものは、先ほど野菜と細胞が共鳴し合うとシヴァ博士がおっしゃいましたが、食べたときに細胞の先まで走ってくる感じがします。そして、のど元で止まらないというのが大切です。人間はものを食べる時に関所がたくさんあって、まずかじって体に入れられる固さか温度かというのをはかります。次に舌で、体内に入れても有害ではないか苦味を検索します。最終の関所がのど元で、ここでやばいと思うと吐き出したり、自然界ではないものが入ると119番通報がなって、白血球が集まってくるんです。そして分解しきれなかったものの死骸をタンとして体の外へ出すことになります。ですから体に悪いものや農薬を使っているものは、食べた瞬間に粘り気がのどにたまってきます。だから自分の体と対話するためには、自分の気持ちを体と同じような状況にすればいいんです。

都会に住んでいる人は毎日お風呂に60秒潜ってください。そうすると、体と気持ちが同じようになってきます。自然界で泳いでいるような感じです。60秒潜ると苦しくなるので、お風呂から上がったときに、気持ちが酸素を求めて、体の毛穴も酸素を求めて、自分の体と魂が同じ方向に向きます。そうすると毛穴をしめたり広げたり、悪いものを食べたならタンを出したり、包丁で手を切っても3分以内に血を止めたりできるようになります。息が続かない人は30秒から始めてください。そうしていくと野菜を食べたときに、これは自然農法だな、慣行農法だなと分かるようになります。これがコツです。これを毎日やっていると時間軸も使えるようになる、生放送にも強くなります。

お二人に質問：

先ほど何が幸せかという話がありましたが、今は価値観というものが問われているのではないのでしょうか。そして、今多くの人が食というものから切り離されてしまい、(例えば、奥田シェフの関連だと食の生産現場から離れた人が多い) そういう人たちに、何が本当に大切なのかとは伝わりにくいのではないかと思います。そういう人たちには、どのようなアプローチが必要なのですか？

奥田シェフ：

いろんなパネルディスカッションをやると、豊かさとは何ですか？ という質問が出ます。経営者として成功した方々は、その質問に答えられないんです。私は友だちがたくさんいて、例えば水がなくなったら水をくれたり、電球

が切れたら換えてくれたり… 先ほどのパワーポイントは友だちが作ってくれまして、僕は料理で返したんです。豊かというのは、必要なときに見渡したら何でもあるということだと思います。ところが、経済のことしか頭にない人は、全部お金で解決しようとする。車が夜道で脱輪したら、そういう人はJAFを呼ぶのですが、僕は友だちに電話して、友だちが引き上げてくれるんです。そういうのが、実はお金のかからないすごくいい社会です。その代わり友だちが困ったら、僕は必ず命がけで助けに行くんです。食べ物も豊かというのは、フルーツがあって、魚もあってというように、自分がほしいときにぱっと手を伸ばしたらある。あと、自分が死んだら、泣いてくれる人がいるとか。そういうのが大事なんです。それが僕は豊かさだと思っています。

シヴァ博士：

私たちはいくつもの変化を今までに経験してきました。何かが変わった場合は、必ず新たな変化を生み出すことができます。今は自然とかけ離れた生き方が蔓延してしまっているかもしれませんが、またそれを自然とつながった社会に変えることはできるはずなんです。人間は変わることができるのです。もちろん簡単ではありませんが、しかし変えられないはずはない。例えば、一つのことについて何が良くて何が悪くてということを見極める目を持つことは非常に難しい。それをただ言葉で説明しようと思ってもなかなかできませんが、具体的に見せてあげれば、人は理解することができます。例えば、奥田シェフのレストランにお友達を3人連れて行って、実際料理を食べさせてあげれば、そこに何が起きているかを体験させてあげれば、きっとそ



の人たちは何かに気付くはずなんです。ですから、そういう具体的な変化を増やしていくことが大切です。一番大事な私たちの意識改革のためには、私たち自身が、自然界とつながっていて、いろんな自然の摂理の下で全てが行われていることを理解する、そういう力を身につけなくてはならないのです。今私たちはあまりにも自然と離れてしまっているせいで、自分たちが自然とつながっていることすら気がついていない人がたくさんいます。だからこそ、少しでも自分と自然がつながっていることを感じられる具体例をたくさん作っていく、それはいろんなレベルで行われなくてはならないと思います。個人レベルであったり、政治的なレベルでも行っていかなくてはならないでしょう。そこでは必ず変革を起こすことができると思います。

司会：

シヴァ博士の答えから、今の社会で子どもたちに教育していくことが非常に重要だと思うのですが、いかがでしょうか？

奥田シェフ：

私は学生時代すごく劣等生でした。バドミントン部のときに、インターハイ選手にあと1点で勝てるというときに、もし勝っちゃったらどうしようと思ったら、ひっくり返されて負けたんです。その後、国体予選と修学旅行が重なって、先生から旅行に行くように言われて少しグレて、お酒を飲んで先生に見つかったり、かけトラップも見つかってあやうく退学させられるところでした。あの時1点取っていたら優等生になれたのに、1点が取れなくて劣等生になってしまった。優等生と劣等生は本当に紙一重なんだなと。そしてスタッフには、まずは料理道に入りなさいと言っています。全ての趣味をやめて料理道一筋にして、料理道のある程度分かってきたら遊びなさいと。また自分だけの武器を持つようにと言っています。人間社会にいと実績というのが必要ですから、一つ一つ実績を作っていくなさいと。やがて、商いができるようになったら、社会的な役割として人様のために役に立ちなさい。儒教の教えで「ソウギョウシン」というのがありますが、雑草魂を身につけて、その後商いができるようになって、そうして自分の信じる信念の方に行きなさいということを教えています。

シヴァ博士：

ナヴダーニャ財団で行っている教育では、とにかく子どもたちに地球、食べ物、種を身近に感じてもらうプログラ



綿花の収穫 Photo ©Manlio Masucci

ムを組んでいます。また、学校にも働きかけて、「Garden of Hope」(希望のガーデン)というものを設けて、実際に子どもたちに作物を栽培してもらっています。土を耕して、種をまいて、収穫することによって、いろんなことを学ぶことができます。今の子どもたちの中には、若くても未来に不安を感じている人がたくさんいます。そういう子どもたちに、自分の手で作物を育てることができる、それによって飢えることがない、ということを経験させるのです。また同時に、土壌を観察し、その作物の成長を見ることによって、生物学も地質学も学ぶことができ、いろんな分野、観点から学びと発見があるのです。特に感じるのは、小さい子どもほど理解力が優れているということです。今年は国連が「国際土壌年」と定めた年なのですが、その土についての大切さを説くと、非常に幼い子どもでも彼らなりにいろいろと考えるのです。一つの例として、今、遺伝子組み換えのパナナがあるのですが、それについて彼らに伝えたら、彼らは真剣にどうしたらいいか、何をすべきかと考えていました。幼いときからそういうことを教えることによって、価値観が変わるのです。もう一つのプログラムはリトル・シェフというもので、小さい子どもたちがシェフになって実際に料理をし、料理を通していろいろと学ぶのです。このように、具体性のあるプログラムによって意識改革がなされるのではないかなと思います。

司会：

今日はお二人に素晴らしいお話を聞かせていただきました。今私たちが無関心ではいられない状況が起きているのは、今社会で起きていることへの関心を高め、それを遠い他人事としてとらえるのではなく、日本には遺伝子組み換え食品が来ないという安全神話のようなものが、間違っていると自覚することではないでしょうか。奥田シェフがおっしゃった、見えないものから7割というように、実は見えないところに秘められた素晴らしい活力、生命力があることに意識を持つべきです。また、シヴァ博士がハッピーな牛がいる環境からハッピーな人間が生まれるとおっしゃったように、人間がハッピーであるためには、美しく清らかな環境で何一つ心配することなく食べることができるという、本当の意味での安全が必要です。調和の取れた中で、本物を理解するための目を養い、素晴らしい食に携わっていくためには、私たち一人ひとりが今日から意識を変えて、私たちの周りの食に意識を持つことが大切だと思います。本日はありがとうございました。

母なる大地：生きている土

～アースフェスティバル2015 ナヴダーニャ～

2015年10月1日、インド・ニューデリーにあるインディア・インターナショナルセンターにてナヴダーニャ財団主催によるアースフェスティバルが開催され、今年も国連の国際土壌年にちなみ「Maati Ma: The Festival of The Living Soil (母なる大地：生きている土のフェスティバル)」と題し行われました。

メイン会場のステージでは、子どもたちの合唱や、トゥムリ(インドの音楽)歌手によるパフォーマンス、ヒンドゥー式のセレモニーで始まり、「生きている土」、「生きている土と文化」、「生きている土とアースデモクラシー」をテーマに3つのセッションが行われ、Shumeiからはアリス・カニングハムが「美しい土」と題して講演を行いました。インドはもとより国を超えて専門家や活動グループなどによる活発な意見交換や発表があり、セッションの合間には学生による劇や朗読、劇団によるパフォーマンスなどが披露され約200名の観客が集まりました。

会場外の広場では、「生きている土」をテーマにしたエキシビションが行われ、環境活動や文化・伝統継承活動に取り組むインドのNGOや学校、日本とオーストラリアの団体など10以上のグループが展示ブースを設けました。Shumeiも、土が織りなす美をテーマに展示を行いました。最後は、インドの豊かな土が育んだオーガニックの野菜や伝統的な穀物を使った盛大なディナーで締めくくられました。

美しい土

秀明インターナショナル理事 アリス・カニングハム

私たちの故郷である地球はギリシャ語ではガイアとよばれ、ラテン語ではテラ、英語ではアース、ヒンディー語ではブーミーと呼ばれます。それぞれ呼び方は違っていても、その多くが、「母なる地球」と例えられています。

古来、人々は生命の源として土を崇めてきました。日本語の土という漢字は約1700年前に中国から伝わってきました。エジプトの象形文字や、その他の古代文字と同じように、中国の漢字も絵文字から発達しました。遠い昔、中国の人々は土の神様を祀る際に、土を柱の形状に固めました。その図形から「土」という漢字が成り立ちました。

日本人は古くから、山や川など全てに神様が宿ると信じ、自然を崇拝してきました。その思想は日本文化の一部として今も根強く残っています。家や建物を建てる前には、その土地の神様(氏神様)を鎮め、土地を借用することの許しを請うために地鎮祭を行う習慣は千年以上前から現在まで続いています。

この自然界への敬意が日本文化の形成に大きく影響を与えてきました。私たちの先祖は自然と調和した生き方、自然尊重、自然順応が、人間と自然界を健全な状態に保つ鍵であることを理解していました。適度に手入れされた森林は清らかな水と肥沃な土壌を人々に提供します。人間と豊かな自然が共存する里山は、地域社会に食べ物や資源を供給し、その土地の生態系と生物多様性を守るだけでなく、先祖代々受け継がれて来た知恵と技術を絶やさない役割も担っています。秀明自然農法「しがらきの里」はこの里山のコンセプトを取り入れた新しいライフスタイルを提唱す

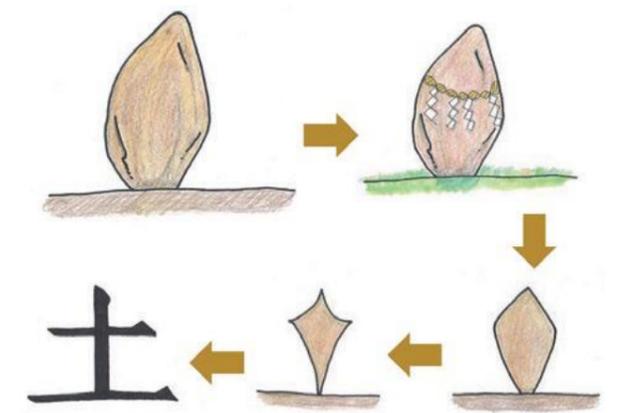
べく設立されました。しがらきの里は単に古い時代の里山を再現するのではなく、先人の知識を現代の生活に反映しています。

農業は単なる食料生産技術ではありません。Shumeiの創設者であり、自然農法を紹介した岡田茂吉師は、農業は生き方であると説き、自然農法を「農業の芸術」と唱えました。農業を通して自然美に対する敬愛を深め、自然の法則を理解し、全ての生き物が共存する調和の心を学ぶことを促したのです。一般的に、土が美の対象になるとは思わないでしょう。しかし、土には多種多様な構造、質感、色があります。日本には土染めという技術があり、美しい色に染め上げられた布地が今も使われています。

そして勿論土は土器、焼物として昔から世界中で親しまれてきました。これらの陶器は日々の生活に美をもたらしてくれるだけでなく、神仏への献饌のための器としても大切に取られてきました。土は私たちの生活を豊かにする大切なものなのです。

英語の「Dirt」という言葉は、もともとは、土を意味しましたが、今では生命体を含まない、塵のようなものを指します。土、土壌の意味を持つ、「Soil」の中には多くの生き物が存在します。日本語に「Dirt」のような言葉が存在しないのは、日本人にとって土は常に生命の源だからではないでしょうか。

MIHO MUSEUMに展示されているケレース神像は、ローマ時代に農業の女神として崇められました。この女神像は右手に麦の束を持っています。古代の人々は肥えた土





秀明自然農法「しがらきの里」

を耕し豊作をもたらす土地で文明を発展させていきました。しかし、いくつもの文明が突然消滅していったのも事実です。科学者の中にはこれらの文明が姿を消した背景には過度の森林伐採や、土壌劣化による農業の崩壊をあげています。都市の発展と共に増加した人口を養うための食料を確保するために、森林伐採を繰り返し、農地を拡大していった結果、土地の再生力は著しく衰え、最終的に再生不可能な土壌劣化を引き起こしたのでしょう。皮肉なことに、食の確保のための農地拡大が食べ物を供給する土壌そのものを崩壊させ、文明そのものの存続が絶たれてしまったのです。

土は地球を覆う単なる表皮ではありません。土の中には何億、何十億という有機物、微生物が生息し、地球上の生物多様性、遺伝子の宝庫です。土が存在しなければ、多くの生物は死滅します。土は動植物に栄養素を供給するだけでなく、不純物、汚染物質などを分解除去し環境汚染の浄

化作用を促します。しかし、そのためには土そのものが清浄でなければならないのです。

残念ながら、多くの人々は人間の健全性に土の健全性が密接に関係していることに気付いていません。今、世界的に普及している産業型農業は土壌の健全性を無視し、大量の化学肥料や農薬等を土壌に投入しています。それによって栄養豊かな作物を育てるのに欠かせない土壌中の膨大な数の微生物にどれほどの悪影響を及ぼしているかなどはまったく考慮されていません。現在、広大な規模の世界の農耕地が長年の化学物質投入等により劣化が進み、土壌中の微生物の数は激減しています。そこから生産される食物は、以前は豊富であった栄養素をほとんど含まなくなってしまうと、私たちは以前に比べて3倍から5倍もの量を食べなければ、以前と同じ量の栄養素を取得できないと唱えています。土は私たちにエネルギーを、生命力を与えてくれます。現在の産業型農業によっ



栗田宏一氏作：ソイル・ライブラリー。日本の着色されていない自然の土のみで作られたオブジェ。



埴輪 見返りの犬(古墳時代)



信楽大甕(室町時代)

て引き起こされた最悪な副産物の一つが土壌劣化であり、今や容易ならぬ事態となっています。

たった1cmの土を形成するのに1000年もかかります。土は本当に貴重なものなのです。土中で何が起きているのかわかることはできません。しかし肉眼で見えなくとも膨大な数の土壌微生物が種に秘められた生命力を呼び覚ましているのです。土には神秘で素晴らしい力が宿っているのです。

そして土は食物生産に欠かせない貴重な存在です。作物が育つために必要なものは全て土壌に存在します。太陽の光と、清らかな水と土壌があれば、何もいりません。作物を育てるのに、農薬や化学肥料その他一切の投入物は必要ないのです。もちろん、遺伝子組み換えの種も必要ありません。

岡田師は、「土を尊び、土を愛する事によって、土自体の性能は充分発揮される。それには何より土を汚さず、より清浄にする事であって、これによって土は喜びの感情がわき活発となるのは言う迄もない」と言っています。私たちの祖先は土が生きており、私たちが土に敬意を払い、土に対し感謝の念をもつことで、土壌は活性化し、豊富な収穫を私たちにあたえてくれることを理解していました。現代社会の生活は自然から離れてしまい、土に触れる事などほとんどない状態です。土の上を歩き、土に触れることで、私たちの感性は刺激され、癒されます。

日本の食文化の発展には自然への敬愛の念が大きく影響してきました。自然を敬い、地域の食材を活かした食を追求する上において、調理の仕方はもちろん、食材を盛りつ



ケレース像(ローマ時代)





Photo@GOZAN KOSHIDA

ける器や盛りつけにまで気配りがされています。美しい四季を感じさせる色合いなど、五感で食を楽しませてくれます。日本の食文化はまさに日本の美を象徴しているのです。

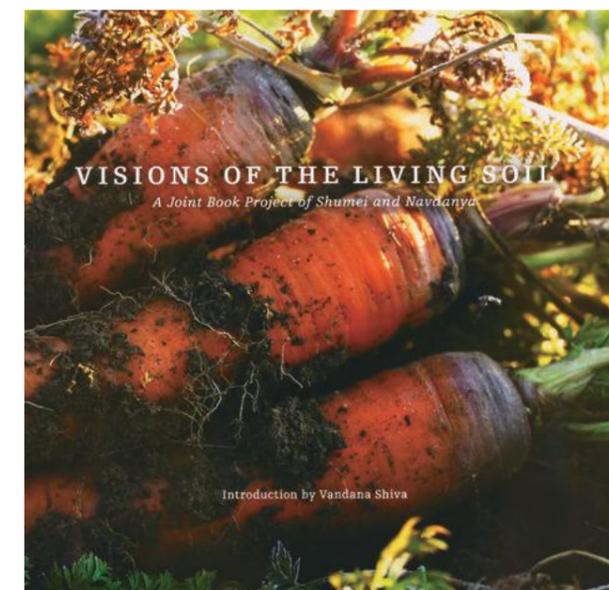
自然界の法則はシンプルですが、そこには完璧な調和が保たれた深い仕組みが存在します。この自然界の法則を理解すると、自然がもたらす美を認識することができ、清らかさこそが、最高の美であることに気がきます。土の清らかさの中に美を感じることができれば、土壌を汚し、操作しようなどとは思わないはず。劣化した土壌を回復させるためには、土が与えてくれる命という贈り物を理解し、感謝することが重要です。そしてその清らかさを維持することで、土はこの世に限りない命を生み出してくれるのです。清らかで健全な土壌は清らかで健全な食物を供給し、そして健全で美しい人間をつくり出します。美しいものに囲まれた生活をおくることで、美を求め、美を感じ、自然を愛する心が芽生えます。清らかで美しい土、種、食の認識を高め深める事で、人間の健康と健全な地球環境を持続することができます。私たち一人ひとりが美しいものを求めることがこの美しい地球を守る重要な鍵となるのです。今、まさに社会が必要としているのは「美」なのです。美しい

ものを求めましょう。

美しいものを求めることは聖なるものを求めることなのです。



Photo@GOZEN KOSHIDA



本年、ナヴダーニャと秀明インターナショナルは、2012年に行われた国連持続可能な開発会議（リオ+20）に合わせて共同出版した書籍「VISIONS OF THE LIVING EARTH」に続くシリーズとして、「VISIONS OF THE LIVING SEED」と「VISIONS OF THE LIVING SOIL」を出版し、今回のイベントで紹介した。

VISIONS OF THE LIVING SEEDは全ての生命の根源である「種」をテーマに、VISIONS OF THE LIVING SOILは、2015年国際土壌年に合わせ、命を生み出す源としての「土」をテーマにし、美しい写真とともに寄稿文が掲載されている。



展示ブースの様子